

私と超音波

小林利次

牧山中央病院



〔略歴〕

小林 利次(こばやし・としじ)

会員番号:710019 日超医・功労会員

1933年桐生市生まれ。58年群馬大学医学部卒業後、5年間渡米。帰国後、名古屋大学大学院医学研究科修了。

国立がんセンター病院(内科医長)、産業医科大学教授等を経て、現在、牧山中央病院・内科(臨床検査部長)勤務。

産業医科大学名誉教授、医学博士。

著書に『落日の地平線』(弦書房・博多JASRAC0406632-401)、

『随筆 壺のたわごと』(弦書房刊ISBN978-4-902116-91-5 C0095)、

『随筆 喜寿の花』(弦書房刊ISBN978-4-86329-017-4 C0095)、

北九州市在住。

「エーゲ海の山彦」

コバルトブルーからネービーブルー、表現しようのない、柔らかな、極、自然の海の色が保たれているのが、エーゲ海である。美しい島々が、星屑のように散りばめられた、エーゲ海の一つの孤島、ロードス島でヨーロッパ超音波医学会がアテネの美人教授のもとで開催された。景勝地での「つどい」ということで世界の隅々から多くの参加者を得て盛会であった。学会最後の締めくくりは参加者多数が楽しんだ「エーゲ海クルージング」であった。

ロードス島はエーゲ海の南東部に存在している人口約九万人の島である。有史以来、ヨーロッパ大陸、その他の多くの国々からの「争い」が続き、戦場の歴史がきざまれている。塩野七生の「ロードス島攻防記」、水野 良の「ロードス島戦記」等、多くの著作で話題になった太陽神ヘリオスの島である。アテネの神殿はその「壮厳さ」という点でもギリシャ文明の生み出した最高傑作である。

アテネ・パルテノン神殿は本当に紀元前五世紀の建造物とは思えない。柱に近づき直上を見ると「素晴らしい」の言葉に尽きる。延べ人数、何人で作ったか判らないが古代ギリシャ人の「叡智」と「創造」とその「逐行」のパワーに唯、敬服するのみである。

素晴らしいルクシャリー・クルージング・ボート・デッキ上でドライのイタリアン・ワイン・ハーフ・ボトルを飲み終わった頃、長年、憧れていたコス島の埠頭に着岸した。憧れていた理由は、ここに医聖ヒポクラテスが眠っているからである。一度、訪れて見たいと恒々思っていたことが成就出来た。プラタナスの大木数本がのびのびと茂って覆っていて、燦々と照りつけるヘリオスを遮り、日陰を作り「暑さ」からヒポクラテスを守っていた。印象的だった。医術の神・医学の祖、術と学を究め、且つ、悟りの境地に達した医聖が此処に鎮座しますという現実に接すると、その恩恵にあずかるべく一時間、その日陰で瞑想に耽った。帰路、「ヒポクラテスの胸像」「知恵鳥・臍皿」「木製ふくろう」などを訪問記念として買い求めた。

ミコノス島(別名、路地の島)も素晴らしい紺碧の海に浮かぶ白一色、迷路・路地の多い平坦な観光地であった。年間、多くのエーゲの海を愛する人々により、季節感なく、時を重ねて居るらしい。

「国際超音波医学に接して」

国立がんセンター在職中の10年は最も充実した臨床研究生を送ることが出来た。超音波医学の魅力に捕りつかれたのは1970年代であった。超音波で国際学会の初檜舞台を踏むことの出来たのはオランダ・ロッテルダム、1970年初頭であったと思う。非常にインパクト強く強烈な印象として刻まれた。国際学会出席の「醍醐味?」を味あわせてもらった。アメリカのインターン・レジデント時代を思い出して良く質問させて頂いた。

ロッテルダムRotterdamはオランダ最大の産業都市であり、近代建築が建ち並ぶヨーロッパの海の玄関口であり、最大の港湾都市としても有名である。

もう故人になられたであろうdandy & handsome Prof.Kazner会長も小生にとっては忘れられない外国人

の一人である。

キンデルダイク郊外の沢山の風車と多彩な色のチューリップ畑と建築の粋を集めた185mのユーロマストが有名であり、マストから見るパノラマは最高の美観である。

「アドリア海の真珠」

クロアチアはヨーロッパのあの有名な長靴の国、イタリアの東海岸のアドリア海を挟んで、丁度、その反対側にある裕福な国である。

山と丘に恵まれた沿岸で素晴らしい葡萄が育つ。アドリアの海の幸と白ワインを楽しむ目的でシーズンを跨いで常時、多くの観光客が訪れる。世界屈指の産婦人科医、エコー研究者アシム・クルジャク (Prof. Asim Kurjak) はザグレブ大学・産婦人科学教授であった。このアシムは、かのオスマン・トルコの栄光の遺伝子が乗っているエリートの中でも毛並みの良いサラブレッドであった。当時、彼の伯父は農林大臣で、親族、すべて、クロアチアを支配していた。

1970年前半、約30年前、アシムが世界各国から錚々たる期学の第一人者を集めて、エコーの革新的な学会を開いた。俺は乳がん超音波診断の分野で招待された。闊達・活発な討論が数日間熱心に行われた。宴席が毎晩開かれた。「偉しやつ程、よく遊ぶ」、ドイツ・ボン大学教授ハンスマン教授(アシムの鼻くそ・目糞)が何時も宴の中心であり、輪舞の世界であった。俺とアシム、ハンスマン、3人が演舞を盛り上げた。宴席は5つ星のホテル・エキセシオールメイン・ロビーで最後はホテルの地下のシーフード・レストラン貸切で連夜、白じら明けまで輪舞が続いた。

「サンパウロ・リオ・デジャネイロの思い出」

超音波医学の橋渡し・仲介の学会・講演旅行で、地球の裏側、ブラジルに約2週間お邪魔した。アメリカ留学に端を発し、44年間に32ヶ国を訪れることが出来た。24時間の空旅だ。

南米の空港に照りつける太陽は燦々としていて素晴らしい。空港では中南米調の踊りを誘う明るいテンポの曲で出迎えのエールを送ってくれた。

まず、サンパウロ医師会主催の講演会で「超音波検査医学の現状と将来」で、腹部腫瘍全般、甲状腺・乳腺・整形外科領域の軟部腫瘍など、幅広い分野の症例画像を供覧した。

広い分野をカバーしたのが効あってか、各専門分野の講演依頼が沢山舞い込んだ。嬉しい悲鳴であった。最後の講演はブラジルの無二の親友、ブラジル産婦人科学会会長Emeritus-Prof. Aristo demo Pinotti招待講演でサンパウロ郊外にある彼の大学講堂(Universitat Campinas)で「乳がん超音波診断の現況」で締め括った。

夜毎、沢山の方々から、大小、様々な晚餐会、ホーム・ディナーなどにお招き頂いた。本当に充実したブラジルの昼夜・一週間であった。

次の一週間は、がらりと変わって、「遊び・趣味」に費やした。「イグアス瀑布紀行」と「アマゾンの大物釣り紀行」、「リオ・デジャネイロ謝肉祭見物」で明け暮れた。

「二人のたび」

愛しい娘と二人だけで外国旅行が出来るとは思っていなかった。娘孝行の日が遂に到来したかという感じの旅を経験した。

或る日、マレーシアの首都、クアランプールから書留航空便が届いた。マレーシア超音波医学会長からの会議への招聘状であった。

乳がん超音波診断の特別講演で確か、三泊四日の招きであった。長女・祐子(山大医学部在学中)が同行したいというので連れて行くことにした。マレーシアの歴史を紐解くと西暦3-6世紀ごろ「黄金半島」の地にマラッカ王国が成立し、世界地図にはマレー半島が「クリス(黄金)半島」として登場した。

会長招宴のテーブルでは祐子その美人会長(サリ姿)の右席、小生が祐子の隣、祐子と会長、会話が進んだ。英会話は英語部で鍛えてあるので楽しそうであった。我が娘にとって最初の英会話であったと思う。

「Scotch-barのやすらぎ」

Scotchの味と香りを楽しむには、やはり英国の片田舎の場末の静かなscotch-barが良い。

ヒースロー空港からロンドン市内の安宿にcheck-inした。タクシーからめぼしをつけておいた宿近くのbarのsingle-shotは流石のからくちの一杯であった。ロンドンに近い田舎で国際学会があった。素晴らしい海水浴場をもつ港湾都市である。

海岸を散歩した折、「水着なしでも泳げます」、というnudist-beachがあるのには驚かされた。さすが英国だなと感激した。「裸になってみたい」と一瞬閃いたが、世界的に変な日本人常識が邪魔して、nudeになれなかった。この旅には種々happeningsがあった。

パリ・モンマルトルの丘の散歩、ビールのほろ酔いでシャンゼリゼに辿り付いた時に、二人の新聞売りのジブシ子供にやられた。一人がアイスクリームを背広に押し付け、「ごめんなさい」と云いながら、ハンカチで拭きながら、一人が「新聞かって」と云いながら、背広の裾を引っ張る。これがパリのジブシーの共同作業のpick-pocketである。

「英国古城と乳がん検診」

英国古城(Leeds Castle)で開催された乳がん検診のシンポに招待された。その一齣をここに紹介する。主催者は乳がん研究の世界第一人者のGuys Hospitalの乳がん外科部長Sir John Haywardであった。ことの発端は慶応大・阿部令彦(おさひこ)名誉教授が英国乳がんのボスJohnに小生を紹介したことに始まる。「英国で乳がん検診のシンポを開くが、日本の乳がんエコー検査をしている人を紹介してほしい」ということで、当時、乳がんエコーを国立がんセンターで手懸けていた小生に「白羽の矢」が立った。令彦先輩は国立がんセンターの同門である。

リーズ城(Leeds Castle)は英国の城館のなかで最も古い古城として有名である。六人の王妃が住んだため、「貴婦人の城」と呼ばれる。北部のケント州にある美しい城である。200万平方メートルの広大な敷地に建つ、レン川の流れが注ぐ湖に浮かぶ城は、世界屈指の美観を提供してくれる。見所は、リーズ城にかかる橋、城の正面、城の中庭であり、湖に黒鳥、白鳥が優雅に泳いでいる。

参加者全員を、その城内の貴賓室に宿泊させた快挙は賞賛に値する。近年流行の「何とかサミット」は、その当時なかったが、敢えて言わせて頂くなら「乳がん検診サミット」に匹敵する「集い」であった。その議事録と共同声明著作が、その道のバイブルとして、カナダのEx-Prof.David Millerの傑力で、刊行された。